

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 7 年 10 月 28 日

氏 名 寺道亮信

所 属 基礎教育学 コース

指導教員名 小玉重夫

1. 研究課題 ジョルジョ・アガンベンの「詩的实践」としての哲学

2. 報告する学術活動の実施期間 令和 6 年 9 月 30 日 ~ 令和 7 年 9 月 29 日

3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し

4. 学術活動

国外 国内

①英語論文公表

②研究科教員の研究プロジェクト参加

③フィールドワーク

④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)

⑥研究指導委託

⑦留学

⑧国際研修

⑨国際インターンシップ

⑩その他 (具体的に : _____)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	⑥
<p>派遣先機関: ナポリ東洋大学 (L'Università degli Studi di Napoli "L'Orientale") 国名・都市名: イタリア・ナポリ 受入身分及び研究科: 客員研究生、人文社会科学研究科 (Dipartimento Scienze umana e sociale) 研究テーマと受入教員: ジョルジョ・アガンベンの「詩的实践」としての哲学、Elena Tavani 教授 受入期間 2024年9月30日～2025年9月29日 具体的な研究活動: 1960年代、1970年代にアガンベンが様々な雑誌に発表した論考を収集した。それらを読解し、同時代イタリアの政治、文学、哲学の状況と照らし合わせて、初期アガンベンの思想形成を明らかにした。そして現在の地点から振り返って、それらの思想がどのような意味を帯びていたかを再検討した。 研究発表内容等の概要: 近年のアガンベンは、初の自叙伝である『書斎の自画像』を皮切りに、これまでの人生の回想を含むエッセイ風の著作を立て続けに刊行し、自身の思索ノート全集の出版も始まっている。一般的には哲学者として知られる彼は、自らの知的活動を「詩的实践」と称しており、実際に若い頃には詩も書いていた。詩と哲学という言語活動の両極に位置するともいえる営為を、アガンベン自身はどのように考え、いかにして自らの仕事を「詩的实践」と見なすことができるのか。そのような観点で彼の「哲学」を概観することで、彼にとっての言語活動と政治の問題に新たな視点からアプローチすることができる。以上の目的のため、彼の初期の文学活動と近年のエッセイ的作品に特に注目し、自身の詩論や哲学についての考え、実際に取っている方法と照らし合わせることで、真に詩を愛し、人を愛する一人のイタリア人としての像を正確に描く。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究創発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

(1) 文献調査

当初、目的としていたアガンベンAgambenの文献調査、特に詩篇の存在については、ローマ国立図書館などを活用して確認、複写することができた。アガンベンは1960年代後半から70年代前半にかけて『テンポ・プレゼンテ』および『ヌオーヴィ・アルゴメンティ』誌に詩を4度発表しており、それらを入手することができた。また、後述する本人との面会により、彼が自作した詩の小冊子の存在を教えてもらうことができた。これは『散文集』と題された冊子で、その題名と存在こそ自叙伝『書齋の自画像』の中で明らかにされていたが、その内容は記されていなかった。今回の面会で、その中身が詩であることを確認できた。なお、現物は1部しか残っておらず受けとることはできなかったが、後日データで送っていただくことができた。

(2) イタリア人研究者との交流

滞在先の大学では受入教員のタバニTabani氏の講義に出席し、フーコーFoucault・アガンベンらの生権力論について議論し、自身の研究に関して重要な示唆を得た。また、ルネサンス期が専門の史学者にして作家のカルロ・ヴェッツェCarlo Vercelli氏のゼミに参加し、イタリア近現代詩の代表詩選を解釈しながら、英語への翻訳、英語詩のイタリア語への翻訳を訓練した。そうすることで、イタリアの現代詩の流れを概観し、アガンベンの詩がもつコンテクストを考えることができた。大学外では、ベンヤミンBenjaminがナポリに滞在した1924年、1925年からの100周年を記念するシンポジウムや展覧会があり、それらを見学することでベンヤミンとイタリアの関わりについて知見を得た。

(3) 初期アガンベンの研究

当初予定していた1960～70年代の初期アガンベンの研究は、昨年アガンベンの思索ノートの全集が刊行を開始したため、いち早くその文献を入手し読解することができた。また、アガンベンが記事を寄稿した雑誌を閲覧することで、当時のイタリアの思想や芸術、政治の状況を把握することができた。

(4) 翻訳

日本語にはまだ翻訳されていない近年の著作を入手し、翻訳に取り組んだ。下訳を完成させたうえで日本の出版社に連絡をとり、出版に向けて話を進めているほか、著者であるアガンベン氏に私のことを紹介いただいた。

(5) 本人との面会

上述のつてを介してアガンベン氏と連絡を取り、8月中旬にご自宅を訪問できることになった。当日は2時間半ほどご自宅に滞在し、世間話から詩の話、翻訳の相談から写真撮影、ご家族との交流など、非常に濃密な時間を過ごした。これは本国際研修なくして成立はしなかった機会であり、イタリア滞在のハイライトと言える出来事だった。今後もメールでのやり取りを続けるほか、再度イタリアを訪問する際にはヴェネツィアVeniceの別邸へ招待いただくことになっている。